

NPO 法人 日本ビオトープ協会  
**第11回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介**

◇顕彰委員会委員長の講評

『ビオトープフォーラム in 愛知』（2019年6月28日）にて

4月に顕彰委員会を開催、各地から多様性に富んだビオトープのご応募をいただき、自然環境と人間環境をどのように結びつけるか皆様ご尽力いただいております、感銘を受けました。受賞された皆様のご紹介を兼ねて講評をさせていただきます。

◎ビオトープ大賞を受賞されました「ビオトープ堤」は、トヨタ自動車の「環境チャレンジ 2050；人と自然が共生する未来づくりへのチャレンジ」の実現に向けた取り組みとして整備されたビオトープであります。堤工場のビオトープは、トヨタ自動車関連工場で約 2800 m<sup>2</sup>と最も大規模に整備されたものです。豊田市の緑の軸・水の軸をつないだ生態系ネットワークに位置付けられています。地域の自然・生き物の新たな里山里地として、環境教育の場としての利活用に加えて、従業員と地域が一体となって生育管理も期待できる絶滅危惧種のウシムツゴ、ミナミメダカなど地域種の保護・育成する活動も行っており、大賞とさせていただきます。

◎審査委員長賞の「アッケシソウ自生地・アッケシランド」は本州唯一のアッケシソウ自生地であり、天然記念物指定されている汽水性の湿地です。平成 15 年に生育が確認されて以降、守る会が中心となり生育地の保全整備がすすめられ、生育地が大幅に拡大しています。同時に生態観察や各種調査も実施されています。今後、アッケシソウを中心とする貴重な汽水性湿地であることから、環境教育の場としての更なる利活用続けていきたいと希望いたします。汽水性湿地は、堰堤が設けられたことによって自然発生的にできた珍しい経緯でできたビオトープであります。

◎環境教育賞の「村松ネイチャーわくわくプロジェクト」は、平成 16 年に遊水地を利用して整備された学校ビオトープです。地域のボランティア団体や保護者と一体となった学校ビオトープ、ESD 学習の場としてビオトープとなっています。とんぼ池周辺にミズナギ草林が整備されたこともあり、最近では絶滅危惧種のヌマエビ、ハイケボタルなどの生息の場となっています。

◎地域貢献賞の「えさし藤原の郷 水路のビオトープ」は、上流部の山際にホテルの生息地があることから、観光名所となっています。「えさし藤原の郷」の寝殿造り脇水路を整備し、ホテルが生息できる環境にしています。いろいろな制約のある中で、ハイケボタル、ゲンジボタルを誘引することに成功し、今後環境教育の場としての利活用が期待されます。

以上、各表彰をさせていただきました4件のビオトープに対し、講評ご紹介をさせていただきました。受賞された皆さまのご努力に敬意を表します。


横浜国立大学名誉教授・前学長、自然環境復元学会会長、協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長




ビオトープフォーラム in 愛知 2019 表彰式・講評・事例発表の様子 ※別紙・フォーラム実施報告書もご覧ください(詳細は協会 WEB ページ)

## ◇ピオトープ大賞


【下記各顕彰書類より転記】

名 称	「びおとーぷ堤」
受賞者	トヨタ自動車株式会社、株式会社伊藤工務店、株式会社エイディーグリーン
<p><b>【テーマ・概要】</b></p> <p>トヨタ自動車は2015年に『環境チャレンジ2050』の指針を作りました。その中に『人と自然の共生する未来づくり』のテーマがあり、堤工場としては従来の『森づくり』活動から自然共生の考えで、横浜大学鈴木名誉教授の監修の下『自然と共生する工場』を目指して地域の生態系を学び、更に有識者の指導を頂き、『この場所にあった里山の風景』を再現出来る様なピオトープ作りに取り組みました。</p> <p>このピオトープは、3つのコンセプトを持っており</p> <p>①里山の再現、水辺を中心とした、この土地に昔からある生態系の保護・育成          ②近自然工法の取入れ加工物をより自然に近い川や緑地に仕上げていく          ③絶滅危惧種の保存・繁殖を考慮した生き物の採取・導入</p> <p>特に、愛知絶滅危惧種ⅠAのウシモツゴの育成繁殖に力を注いでいます。また、従来のピオトープの課題を洗い出し、その課題対応も合わせて行いました。</p> <p>このピオトープは、地域とのコミュニケーションの場として活用し、更に環境学習の場として市のエコツアーや県の環境ネットワークへの参画、また小学生の環境教育場として活用してもらえる様、更にレベルアップして行きたいと考えています。</p> <p><b>【整備方針と管理手法】</b></p> <p>① ピオトープ管理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・草刈 自然の形で形成（多様な空間を創るように工夫）</li> <li>・生態系維持 指標種を決め年に数回指標種調査を行い、指標となる虫・鳥などの生息をデータの把握と改善を展開していく</li> <li>・日常の水質管理と、木々草木の適切な育成管理</li> <li>・定期的な外来種駆除等（従業員と地域が一体になって行う）</li> </ul> <p>② 環境教育の場作り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市が展開している企業のエコツアー活動紹介に登録し、より多くの方が訪問出来るピオトープ作りにチャレンジしていく</li> <li>・地域の小学校のピオトープ学習の場として活用して頂く</li> </ul> <p>③ 今後の管理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も鈴木先生をはじめとする、有識者の方々に定期的な指導を受け理想の里山作りを目指します。</li> </ul> <p>『堤に行けば、この地域の里山の様子が良く判る』と言われる様な管理を目指します。</p>	
	

## ◇審査委員長賞

名 称	「アッケシソウ自生地『アッケシランド』」
受賞者	浅口市寄島町アッケシソウを守る会、岡山県浅口市
<p><b>【テーマ・概要】</b></p> <p>岡山県浅口市寄島町寄島干拓地内にあるアッケシソウ自生地は、本州唯一の自生地であり、浅口市天然記念物に指定しています。アッケシソウは、塩湿地に生息する1年草の植物であり、環境省が絶滅危惧Ⅱ類に指定しています。当地区のアッケシソウは、平成15年度に初めて存在が確認されました。その後、平成16年度にアッケシソウを守る会が結成され、生息範囲は当初約460㎡であったが、現在は約3,000㎡に拡大しています。守る会は、この貴重な植物を保護管理、保存し、次世代へ継承することを目的としています。地元小学校の環境教育の場としても活用され、守る会会員が講師を務めています。秋季には、アッケシソウの開花や紅葉に多くの来訪者があります。また、当地は、鴨類中心に冬鳥の飛来地でもあり、野鳥観察の場としても利用されています。</p> <p><b>【整備方針と管理手法】</b></p> <p>希少植物のアッケシソウ自生地を中心に、周辺に海浜植物を揃えた海辺の自然公園として整備を進めています。自生地最大のA地区は、平成21年度に展望台や柵を整備して、環境保全を図っています。平成28年度は、C地区に木道を設置して、アッケシソウの生態をより至近距離で見学できる環境を創出しています。管理は、アッケシソウの天敵であるヨシとの格闘であります。年10回程度のヨシや雑草の草刈りや環境整備、アッケシソウの生態観察、分布調査や塩分濃度測定等を実施しています。</p> <p>近年では、小学生、高校生や地元企業がボランティアで、草刈り清掃活動にご尽力いただき、地域及び異世代間交流の場となっています。</p>	
	

## ◇環境教育賞

名 称	「村松ネイチャーわくわくプロジェクト」
受賞者	東海村立 村松小学校、株式会社砂押園芸、まさきフレッシュ会
<p><b>【テーマ・概要】</b></p> <p>「村松ネイチャーわくわくプロジェクト」という名で学校ビオトープの自然環境の再整備とそれを有効活用した「自然環境から学び科学する心の育成」を教育活動の一つの柱に据えてきました。</p> <p>ハイケボタルの放流と観察会には地域の方も参加し、学校だけでなく地域の方にとっても貴重なものとなっています。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b></p> <p>学校ビオトープ内にハイケボタル保存地帯を設置し、東海村環境政策課、新川水系環境ネットワーク、日本生態系協会等と連携し、5年生を対象にE S D学習を実施。</p> <p>今年度はハイケボタルの自然発生が確認出来、絶滅危惧種のヌマエビの存在が認められ、湿地部分のとんぼ池と広場部分のミニ雑木林の整備が出来ました。</p> <p>今後もこのような身近な自然を学校と地域が一体となり守り育てて生きたいと考えています。</p>	
	

## ◇地域貢献賞

名 称	「えさし藤原の郷 水路のビオトープ」
受賞者	小岩井農牧株式会社、江刺開発振興株式会社
<p><b>【テーマ・概要】</b></p> <p>江刺区は、田んぼや用水路はありますが、肥料・農薬、光源の散在などの理由でホタルの観察地は少ないです。えさし藤原の郷は観光地ですが、ホタルの観察を目的に水路の整備を計画しました。調査段階で、①カワニナが多い②水温が低い③光源が少ない等により夜間確認したところ、ハイケ・ゲンジともに生息が確認されました。これにより整備の方針は①現状のホタルの生育を妨げない②生息可能域を広げる③水路の安定した水量確保を重点に整備・計画を開始しました。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b></p> <p>主なホタルの生息域は上流部の山際であり、下流寝殿造り脇水路への誘引・繁殖を試みました。建物脇水路はコンクリート三面張り、水深通常 10-15cm、底に泥が溜まりカワニナが健全に繁殖していました。生活史を完結できるよう、①アゼスゲ他植物植栽②土羽部③水苔部分を設置しました。それら各セットをせせらぎに瀬とよどみが出来るよう千鳥に配置しました。</p> <p>今年度の結果として水路内での幼虫の観察、大路でのホタル飛翔が確認できました。設置した植物上で多く見られたように思います。6月ー7月は週末にホタル観察を行いました。観光地であり足元が平坦なためアクセスが容易で子どもでも安心して観察できました。</p>	
